



智村駒場

満蒙開拓記念館 県後押し

県が、下伊那郡阿智村で計画されている満蒙開拓平和記念館の建設費の補助金を来年度当初予算案に盛り込む方針を固めたことが22日、分かった。旧満州（中国東北部）に全国最多の約3万3千人の開拓団員を送り出した長野県。来年は日中国交回復40年の節目に当た

来年度予算計上へ

り、高齢化が進む帰国者は「ようやく（いままで）着着けた」次世代に伝える記念館となるよう着工を急ぎたい」と歓迎している。

飯田下伊那地方の有志らでつくる事業準備会によると、記念館の総事業費は1億3千万円。しかし、2006年の活動開始からこれまでに集まった寄付は4千万円余にとどまっております。

り、県と飯伊地方14市町村の南信州広域連合は差額を負担する方針。県の補助割合は今後詰める。

同広域連合は同日、県庁に阿智部守一知事を訪ね、15日の広域連合会議で記念館の建設支援を

満蒙開拓平和記念館の予定地。中島多鶴さんから元開拓団員の悲願が一步前進する。阿智村駒場

阿智で計画 帰国者「前進」と歓迎

決めたことを報告し、財政支援を要望。知事は「広域連合と一緒に取り組み、前向きに進めていきたい」と述べた。

県が補助することが決まったことに、1939（昭和14）年に満州に渡って、戦後は中国残留邦人の帰国支援に長年取り組んできた中島多鶴さん（86）は「下伊那郡泰皇村は「本当にうれしい」。「悲惨な歴史を後世に伝えていくためにも、1日も早くできてほしい」と期待を込めた。

記念館建設の必要性を訴えてきた事業準備会事務局長の寺沢秀文さん（57）は「同郡松川町は」この3月、元開拓団員の父・幸男さんを91歳で亡くしている。引き揚げ者の高齢化は進んでおり、「戦争を知らない世代が、平和の尊さを語り継がなければいけない時代。記念館を通じて満蒙開拓は何だったのかを考えていきたい」と話し、来年の着工に強い意欲を示した。